平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名（ふりがな：ほっかいどうきょういくだいがくふぞくはこだてちゅうがっこう）	北海道教育大学附属函館中学校

校 長 名：相田　幸男

所 在 地：北海道函館市美原3丁目48番6号

電話番号：0138-46-2233

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	外国語

≪研究主題≫

コミュニケーション能力の素地を踏まえた中学校での学習指導の工夫　－第１学年における年間指導計画の作成と教材開発を通してー

【研究の要点】

キーワード　→　外国語活動，小中連携，年間指導計画

コミュニケーション能力の素地を踏まえた中学校での学習指導を実施していくにあたり，附属函館小学校の外国語活動の取組を把握し，小中の年間指導計画の作成や教材開発に着目した。

具体的には，聞く・話す中心の帯的な活動を取り入れたり，視覚教材と教科書教材に工夫を加えたりなどをすることによって，外国語活動との接続を意識した指導を行った。そして，新学習指導要領に対応した中学校第1学年における年間指導計画を作成した。

これらの取組によって，外国語活動で慣れ親しんできたことが中学校でも無理なく生かされ，学習効果が期待できることが明らかになった。課題としては，小中連携したカリキュラムの作成において，目標や学習段階に応じた評価の研究を十分に進めることができなかったことが挙げられる。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

本校は，平成19年に創立60年を迎えた函館市で一番古い伝統のある中学校である。校地内には，附属幼稚園・附属小学校・附属特別支援学校が併設されている。生徒は函館市を中心に周辺市町から登校しており，各学年の約2/3が附属函館小学校からの連絡進学者である。

附属函館小学校では，平成７年度から単発的にではあるが何らかの形で英語活動が行われている。そのため，中学校入学当初から生徒の音声に対する反応はよい。

また，平成20年度と21年度には，小中連携をテーマに附属函館学校園で共同研究会を行い，本校１年生と附属小学校の児童が交流する場面を設け，各教科等で小中の接点を探る研究に取り組んだ。

２　学校の概要（平成22年4月5日現在）

	１年	２年	３年	計
学級数	3	3	3	9
生徒数	117	123	117	357

教員数　18名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

コミュニケーション能力の素地を踏まえた中学校での学習指導の工夫　－第１学年における年間指導計画の作成と教材開発を通してー

(2) 研究主題設定の理由

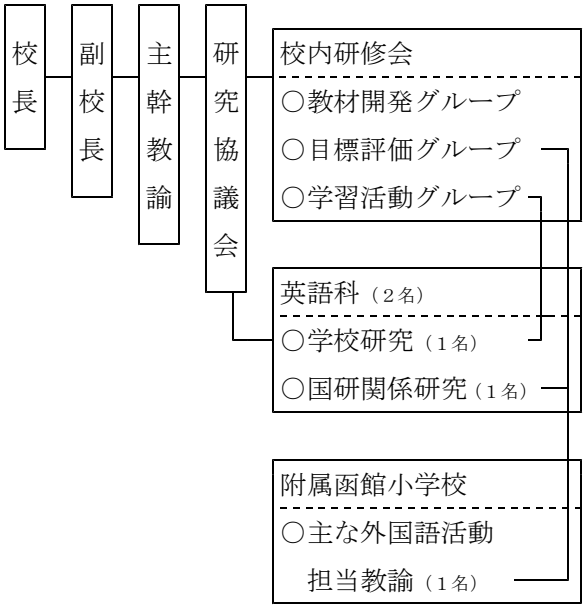
平成21年度に実施した本校１年生へのアンケート調査（以下，生徒へのアンケート調査）によると，98％が何らかの形で小学校で英語活動の授業を受けてきている。しかし，学校によって頻度に差があり，二週に一回というところから，５年生では授業が行われたが学級担任が代わった６年生時には一度もない，というところまでさまざまである。また，内容についても，ALTが来校したときにALTがメ

インでゲーム中心の活動をするという学校もあれば，中学校の英語科教員が来校し，学級担任とティーム・ティーチングを行うところもあるなど，学校間でばらつきがある。いずれにしても，98%の生徒たち全員が計画的に継続して英語にふれてきたわけではない。

そこで，研究主題を「コミュニケーション能力の素地を踏まえた中学校での学習指導の工夫」とし，小学校において初めて導入される外国語活動と中学校外国語科の接続を図り外国語活動の効果が中学校の授業に現れるような工夫や教材開発等を行いながら，第１学年における年間指導計画を作成した。

(3) 取組体制

本校の取組体制は，次の図に示すとおりである。



本研究については，学校研究とは別に英語科に任せられている状況である。英語科の取組としては，附属函館小学校の主な外国語活動担当教諭と定期的に打ち合わせを行うとともに，北海道教育大学函館校教授や北海道教育委員会担当指導主事の指導を積極的に仰ぎながら指導方法について研究を進めた。

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	○研究の概要の作成（４月） ○教科研修会（研究の具体的プランの作成，５月） ○校内研修会・講師招聘（指導方法の検討等，６月） ○生徒の実態把握（アンケート等，６月） ○校内研修会（授業公開，７月） ○本校教育研究大会教科研究紀要作成（８月） ○本校教育研究大会学習指導案作成（９月） ○本校教育研究大会実施（授業公開，10月） ○生徒の実態把握（アンケート等，11月） ○附属学校園共同研究原稿作成（12月） ○研究協議会資料提出（12月） ○中学校第１学年の年間指導計画の見直し（１月） ○研究協議会実施（２月） ○附属函館学校園共同研究原稿作成（２月） ○附属函館学校園共同研究会授業提案（２月） ○研究成果中間報告書作成（２月） ○１年次の研究のまとめ（３月）
平成22年度	○中学校第１学年の年間指導計画の見直し（４月） ○教科研修会（研究の具体的プランの修正，５月） ○生徒の実態・変容把握（アンケート等，６月） ○校内研修会（授業公開，７月） ○本校教育研究大会教科研究紀要作成（８月） ○本校教育研究大会学習指導案作成（９月） ○本校教育研究大会実施（授業公開，10月） ○生徒の実態・変容把握（アンケート等，11月） ○研究協議会資料提出（12月） ○中学校第１学年の年間指導計画の完成（12月） ○研究協議会実施（１月） ○２年間の研究のまとめ・報告書の作成（３月）

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点

外国語活動との接続を意識した指導の工夫と年間指導計画の作成に重点を置いて研究する。

(2) 具体的な取組

①　聞く・話す中心の帯的な活動の導入

外国語活動では，言葉の大切さや豊かさ等に気付かせ，言語に対する興味・関心を高めたり，積極的に自分の思いを伝えようとする態度等を養ったりすることをねらいとしている。

そこで，中学校第１学年においても，小学校で慣れ親しんできた語彙や表現を中心に取り扱う帯的な活動を指導計画に取り入れ，スムーズに中学校の学習内容に入れるよう配慮する。

同じく帯的な活動として，自己紹介，友だち紹介，わたしの家族紹介というような発表活動を組み込んでいく。英語ノートには，～を紹介しよう，～を発表しよう，という活動が多く盛り込まれており，附属函館小学校の外国語活動でも，他の児童の前で積極的に英語で表現する活動を多く取り入れている。

本校でも，このような発表活動を初期の段階から重視し，人前で間違いを恐れずに堂々と発表しようとする意欲を喚起して，英語学習への抵抗感を和らげるように配慮している。

② 教材の工夫

音声中心で進められる外国語活動の授業では，英語の歌，チャンツ，ライムがよく扱われ，英語ノート付属のＣＤや電子黒板用ソフトといった視聴覚教材が充実している。

中学校でも，視覚教材としてウォールピクチャーを有効に使い，本時で使用したウォールピクチャーの縮小版を，次時使用するウォールピクチャーの横に貼って復習を兼ねるようにするなど，用途を工夫した。

また，帯的な活動の一つである語彙項目に慣れ親しませる活動では，本時の学習内容にかかわる語句を絵カードにしたものをペアまたはグループ数分用意したり，ホワイトボードとマーカーを利用して絵を描きながら英語でヒントを出して当てさせるなど，視覚に訴える自作教材を積極的に活用するようにした。

③ 指導法の工夫

生徒へのアンケート調査によると，「小学校英語と中学校英語で同じだと感じること」という問いに対しては，ゲームを通して友だちと楽しく活動することと，ALTを含む外国人とコミュニケーションをすること，という回答が一番に挙げられている。

外国語活動ではゲーム的な要素を含む活動が多く行われていることから，中学校の初期段階においては，遊び感覚で練習する方法を様々な場面で取り入れている。内容については，英語ノートや外国語活動の実践例を参考にしながらも，小学校のやり方と全く同じものにならないように工夫した。

小学校では，学級担任が児童の興味・関心に基づいて様々な活動を工夫して授業を構成するが，中学校では，クラスサイズ，学習形態，活動時間，ALTからのアドバイス等も考慮しながら，中学生の発達段階に合わせたコミュニケーションを図る活動を設定している。今のところ，子どもたちはこうした新しいゲーム的な活動を楽しんでいるようだが，時機を見てさらに新しいものを取り入れていきたい。

また，ALTの配置時間を１年生の授業に多く配分し，ティーム・ティーチングの利点を生かして二人の指導者でクラスサイズを半分にして担当する活動を多く取り入れたり，ロールプレイングを行うために机や椅子のない多目的教室を使用したりした。

④ 音読・視写，多読の奨励

読むことや書くことは中学校からの指導事項であることを踏まえ，リーディングやライティングの導入と興味・関心のもたせ方を工夫した。

生徒へのアンケート調査では，新しい単語を発音したり教科書を音読したりすることを好む生徒の数が増えてきている。これは，いろいろな工夫を行い，正しい強勢，イントネーション，区切りなどを用いて音読する活動に力を入れてきた結果の現れだと思われる。

一方，同じアンケート調査によると，本校１年生が苦手だと感じていることは，英文の暗記や英文を書くことにある。言い換えれば，このような暗記や書くことへの抵抗感が少なくなれば，もっと積極的に中学校の学習に取り組めるのではないかと考えた。そこで，音読を視写へ生かすために，教科書デジタル教材を利用して，生徒が自分のレベルに合わせて選択して取り組めるように数種類のワークシートを作成する。そして，次時にディクテーションを行い，暗写へとつなげていく。このように，事前調査から生徒が苦手意識をもっていると分かっていることに対しては，教科書を中心にスモールステップで取り組ませるようにする。

附属函館小学校の外国語活動では，一昨年度から絵本を使って読み聞かせをしたり，絵本のストーリーコンテストを行うなど，英語の本に慣れ親しませる活動に取り組んでいる。これに合わせて，中学校の図書室には平易な英語で書かれた絵本から名作まで，いくつかのレベルの絵本を約100冊ストックしている。本校の生徒は，朝読書の時間や休み時間に本を読んだり，図書室にある本を読む生徒が比較的多く見られるため，中学校においても英語の本を読むことを奨励している。生徒へのアンケート調査によると，これらの本を読んだことがある１年生は35％であるが，英語で書かれた本をもっと読んでみたいという希望をもっている生徒は少なくない。

そこで，長期休暇を利用して，北海道教育大学附属図書館函館館を活用して絵本を読み，感想を書いて提出するという取組を行った。これは，基本的に全員に案内はするものの，希望する生徒だけが冬休み中に自主的に行うものである。大学附属図書館には，小中学生向きの絵本から上級者用のペーパーバックまで大量にストックされており，自分のレベルに合わせて好きな時間に好きな分量の本に親しむことができる。このように，外国語活動で興味をもった読書活動について，中学校では多読の奨励を切り口に校内外での取組を充実させた。

⑤　年間指導計画の作成

外国語活動との接続が求められている中で，小中の接点である第１学年の年間指導計画の作成に取り組んだ。特に，小中の接点が俯瞰できるように，英語ノートとの関連にふれながら，各月に「外国語活動を踏まえる視点」を設け，その具体について詳細版を整理した。

また，これまでの指導計画をもとに，新しく「聞く・話すを中心とした帯的な活動」と「読む・書くを中心とした活動」の欄を加えた。聞く・話すについては音声中心の帯的な活動とし，絵カードを用いたゲーム的な活動とワークシートを用いた発表活動に分類した。これに伴って，附属函館小学校の外国語活動の年間指導計画にも中学校第１学年と関連する欄を設け，聞く・話すことについて中学校の帯的な学習につながりができるようにした。

さらに，外国語活動との接続を意識して「コミュニケーションを円滑にする」などの言語の働きのいくつかの配列を，教室英語やTPRと関連させて４月の入門期に扱うように工夫した。

(3) 考察及び成果と課題

○聞く・話すことが中心に行われる外国語活動を踏まえて，「聞く・話すを中心とした帯的な活動」を年間指導計画に取り入れることによって，小中の年間指導計画に目標の一貫性，指導内容の系統性，指導法の継続性といったつながりができるようになった。

○附属函館小学校との情報交換や交流を通して，年間指導計画の各月に「外国語活動を踏まえる視点」を記載するとともに，その具体を表す詳細版を作成した。

一例を挙げると，５年生12月に行われる英語ノートのLesson 5「買い物をしよう」を踏まえて，１年生７月に学習するハンバーガーショップでの注文のやりとりを基に中学生版の「買物ゲーム」を行う。その際，「外国語活動を踏まえる視点」として

> 小学校での買物のやりとりを踏まえ，How many ～? 等を用いて店員と客とに分かれてロールプレイングをする。

を設定する。また，以下のようにこの視点の詳細を整理しておく。

> 外国語活動でよく行われる買物のやりとりをロールプレイングで行う。いろいろな物が単数と複数で描かれた絵カードを用いて，まずカルタゲームで複数形に慣れ親しませておく。その後，中学校で学習する，How many ～s do you have / want? を用いて物の数や相手の意向を尋ねたりそれに答えたりしながら，指導者が設定した金額に一番近い買物をした人が良い結果になるようにする。生徒は，絵カードを交換したり，ワークシートに記入したりしながら，文具店，ペットショップ，スポーツ用品店，フルーツショップなど設定したすべての店で，店員と客の両方の役になって買物のやりとりができるように，多目的室や体育館のような広いスペースを利用して行う。

このように視点を明示し，その詳細を記載したことによって，外国語活動との関連がとらえやすくなり，意図的・計画的な指導が一層進めやすくなった。

○年間指導計画に「聞く・話すを中心とした帯的な活動」と「読む・書くを中心とした活動」の欄を併記したことにより，学習指導要領改訂における今後の指導改善のポイントの一つである「４技能の総合的な育成」が意識され，単元における学習活動の流れをイメージしやすくなった。また，これら２つの活動に関する「年間指導計画補足資料」を整理した。

○生徒へのアンケート調査によると，90％の生徒が帯的な活動を「行って良かった」と評価している。語彙に親しむ帯的な活動については，「楽しく学べた」「今まで知らなかったいろいろな種類の単語に親しむことができて良かった」という回答が，「楽しく学べなかった」「いろいろな種類の単語に親しむことができたが，すでに知っている単語ばかりだった」「知らない単語ばかりで負担になった」という否定的な回答を圧倒的に上回っている。その一方で，発表活動を中心とした帯的な活動について「みんなの前で発表する自信がついて良かった」という肯定的な回答は全体の18％にとどまった。

○生徒へのアンケート調査では，絵カードを使った帯的な活動は約９割の支持を得ており，「いろいろな種類の単語に親しむことができた」「絵があることによって単語のイメージをもてた」という回答が多い。同じ帯的な活動であるワークシートを用いた発表活動についても，「実践的でとてもいいと思った」「自然に文章を読む力がついて良かった」など，９割以上の支持を得ている。どちらの活動も，中学生の発達段階に合わせたゲーム的な要素を取り入れた成

果と受け止めている。

○上と同じ生徒へのアンケート調査を分析すると，半数以上の生徒が「中学校に入学したときに，英語の授業に不安があった」という質問に「よくあてはまる」または「ややあてはまる」と回答している。一方，「その後，英語の授業についてどう感じているか」を尋ねたところ，半数近くの生徒が「思っていたよりよく分かる」と回答しており，「思っていた通りよく分かる」を含めると74％の生徒が中学校の英語の授業についてよく分かると感じている。これは，「小学校の授業ではよく分からないで使っていたことが（中学校の授業で）分かった」という記述に代表されるように，中学校の授業で言葉のきまりを学習して分からなかったことが分かるようになったことが，大きな要因になっていると思われる。この結果から，中学校に入学したばかりの頃に抱く不安をいくらか軽減できたのではないかと考える。

●中学校から本格的に始まる「書くこと」については，生徒へのアンケートを基にして暗記や視写，暗写といった取組を行ったが，他者とのかかわりが薄い活動であるため，もっとコミュニケーションにつながるような工夫が必要である。そこで，これらの取組の他に，話す・書く中心のペア活動として，教科書本文の内容についてのQ&Aを取り入れたり，まとまりのある英文を書いたものを帯的な活動で発表したりすることによって，ドリル的な学習だけで終わらせないように工夫する。

●帯的な活動については，約９割の支持を得ていることが生徒へのアンケート調査から伺えたが，絵カードを用いた活動については「知らない単語が多かった」「少し子どもっぽい」という記述がみられた。これについては，語彙を精選することと，活動の仕方を工夫することで改善できると思われる。また，ワークシートを用いた発表活動について「みんなの前で英語を読むのは不安だ」と回答した生徒に聞き取り調査を行った。すると，この回答には，「（英語に関係なく）みんなの前で発表するのが緊張する」という不安と，「（自分が書いた英文ではなく）級友が書いた英文を発表するので英語を読めるかどうか不安」という２通りあることが分かった。これについては，小学校の授業等で行われた発表活動の実態をもっととらえておく必要がある。中学１年生でゼロの状態から発表活動をさせるのではなく，どこまで経験しているのか，困難な点は何なのかを把握し，それらを指導計画に反映させることによって生徒の肯定的な評価が高まることが期待できる。合わせて，発表方法や評価の仕方も工夫することで，生徒の負担を軽減していきたい。

３　研究の成果と課題

２年間の研究を振り返ると，コミュニケーション能力を育成するという共通の目標に向けて議論を重ねながら，附属函館小学校との情報交換と交流を深め，小中協力してカリキュラムの作成を進めることができたことが一番の成果である。

また，生徒側に見られた変化として，外国語活動の経験が見え隠れするワークシートへの記入状況や発表活動の様子，毎日課している家庭学習ノートの練習状況において効果が現れてきている。

しかし，「５年間一貫した目標」「系統性をもたせた学習内容」「継続性のある指導法」「目標や学習段階に応じた評価」について検討する余地は残されており，今後も小中で連携を図りながら指導方法の在り方や教材の工夫・開発を行っていき，カリキュラムの有効性や今後の課題を検討していきたい。

平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名（ふりがな）	横浜国立大学 教育人間科学部 附属横浜 中 学校（よこはまこくりつだいがくきょういくにんげんかがくぶ ふぞくよこはまちゅうがっこう）

校 長 名：蝶間林利男

所 在 地：神奈川県横浜市南区大岡2-31-3

電話番号：045-742-2281

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	外国語

≪研究主題≫

思考力・判断力・表現力等をはぐくむための指導に関する研究　―４技能を統合的に取り入れた言語活動の工夫―

【研究の要点】

(1)研究主題設定の理由

思考力・判断力・表現力等の育成を推進するために，外国語科においては4技能を統合的に活用させる指導の工夫が必要であることと，そのことは本校が昨年から研究課題として取り組んでいる「言語活動の充実」を図ることによって実現できると考えるためである。

(2)研究の重点

本校が近年取り組んできたPISA型読解力の育成における学習プロセス「受信→思考→発信」は，「聞くこと」「読むこと」のインプット活動を充実させ，その内容についてじっくり考えることを土台として，「話すこと」「書くこと」の表現力をさらに伸ばしていくことと軌を一にするものである。これはまさに「思考力・判断力・表現力等の育成」であるので，本校英語科では「思考力・判断力・表現力等」は「4技能を統合的に取り入れた言語活動」によって育成されるものと捉えて研究をすすめる。

(3)主な取組の概要

スモールチャット"1 minute talk"，パラグラフ・ライティングの指導と，教科書を使った4技能の統合的な活用。

(4)成果と課題

スモールチャットの "1 minute talk"では，「話す」だけではなく4技能を統合的に活用させることができた。パラグラフ・ライティングでは，相手に伝わりやすい文章構成を意識して書くようになっただけでなく内容も充実したものとなってきた。

これらの成果を本校研究発表会や書籍，講師派遣を通して全国に発信していく。今後は，最終ゴールとなるトピックを設定し，3年間を通して系統性のあるライティング活動に取り組みたい。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

・神奈川県立光陵高等学校との連携型中高一貫教育に，リテラシーという「考える」ことを基軸とした学力の育成を位置付けている。

・通学区域が広いため地域との関係はやや希薄であるが，保護者は学校に大変協力的である。

２　学校の概要（平成22年4月5日現在）

	１年	２年	３年	特別支援学級	計
学級数	3	3	3		9
生徒数	131	135	134		400

教員数　21名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

思考力・判断力・表現力等をはぐくむための指導に関する研究　―４技能を統合的に取り入れた言語活動の工夫―

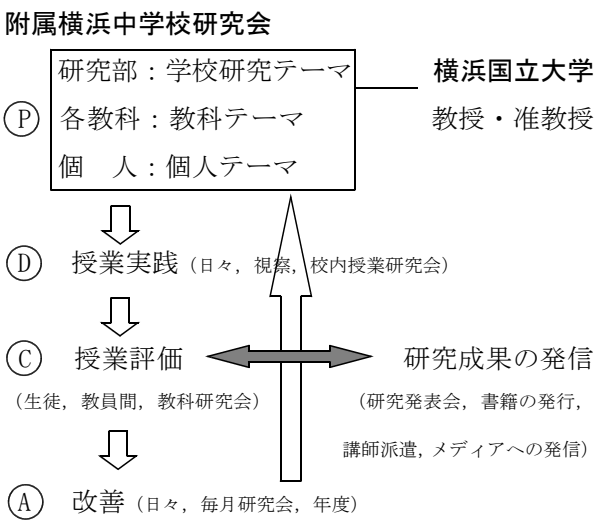
(2) 研究主題設定の理由

・思考力・判断力・表現力等の育成を推進するために，外国語科においては４技能を統合的に活用させる指導の工夫が必要であると考えるため。

・中学校学習指導要領外国語科改訂の趣旨において再三述べられている「４技能を総合的に育成する」ことや，平成19年6月に一部改正された学校

教育法に示された学力の要素の中の「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」の育成は，本校が昨年から研究課題として取り組んでいる「言語活動の充実」を図ることによって実現できると考えるため。

(3) 取組体制



PDCAのサイクルに基づいたカリキュラム･マネジメント

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	主な取組は，スモールチャット"1 minute talk"とパラグラフ・ライティングの二つである。1 minute talk は「話す」だけで終わらず，４技能に有機的に派生させて行った。パラグラフ・ライティングは，思考力・判断力・表現力等を育成するための，相手に伝わりやすい文章の構成を意識して書く指導である。その指導の結果，箇条書きで事実を羅列するだけだった生徒も適切なつなぎ言葉を使って意見や感想を述べられるようになった。
平成22年度	前年度は教科書に直接関連する学習活動を取り入れた事例が少なかったため，1 minute talk は教科書本文の主人公の言動を取り上げ，道徳的に思考力を働かせる機会を増やした。パラグラフ・ライティングも継続して繰り返し行った。また，教員が普段からより多くの英語を使用することを心がけ，インプットの充実を図り，思考力・判断力・表現力等の育成を推進した。

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点

本校が近年取り組んできたＰＩＳＡ型読解力の育成における学習プロセス「受信→思考→発信」を本研究の中心に据えることが第一である。この学習プロセスは，「聞くこと」「読むこと」のインプット活動を充実させ，その内容についてじっくり考えることを土台として，「話すこと」「書くこと」の表現力をさらに伸ばしていくことと軌を一にするものであり，これはまさに「思考力・判断力・表現力等の育成」である。また，結果として４技能を総合的に高めていくことにつながる。

したがって，本校英語科では「思考力･判断力・表現力等」は「４技能を統合的に取り入れた言語活動」によって育成されるものと捉えて研究をすすめる。ただし，英語で「思考・判断」することを目指すわけではなく,基本的には日本語で「思考・判断」する力と，それらを英語で「表現」する力を育成することを意味している。

その中で，教科書を使っての指導にも重点を置き，どの中学校でも実践できる事例を開発する。

(2) 具体的な取組

① スモールチャット

どの学年も共通して１分間のスモールチャットを行っている。

１年生は後期から様々な疑問文のパターンプラクティスの形式で行い，２年生からは"1 minute talk"と称して，与えられたトピックについて１分間自由に会話する。これは「話す」活動であるが，会話で得た情報を直後に要約することで「書く」活動につなげている。また，TTでの会話を「聞く」活動から導入したり，その会話原稿を「読む」活動として取り組ませることもできる。また，ワークシートには「言えなかった表現」の欄を設けて毎回の宿題として語彙の充実も図っている。今年度は前年度の課題を受け，1 minute talk のトピックとして教科書本文の内容を積極的に取り上げ，以下の手順で行った。

１．Listening で概要をつかむ。

２．主人公の気持ちの変化に注意しながら内容を理解する（Reading)。

３．"What do you think of Hiro's way of thinking?" をトピックに 1 minute talk を行い，主人公の気持ちについて意見を交換する（Speaking)。その後，主人公と自分の気持ちを照らし合わせながら，自分の考えを文章にまとめる（Writing)。

② パラグラフ・ライティング

Mapping を用いて文章の構造を考えること，Topic sentence, Supporting sentences, Concluding sentences の流れで文章を書くことにより思考の過程を明らかにすることができる。

次に，その思考を具現化するためには既習の語彙や表現の方法のうちどれが適するのかを判断し，英文で表現する。

原稿作成後，他者にとってもそれが分かりやすい構成の文章か，語彙や表現は分かりやすいかどうかを確認するため，ペアでチェックする。この作業により，他者に構成の善し悪しを指摘してもらうと共に，他者の文章を読むことで，「分かりやすい構成や語彙，表現の選択とは何か」を認知することができる。思考力・判断力・表現力等を育成するためには，この過程を繰り返し行うことが必要である。

評価においては，「文法，構成，内容」の３点から評価し，読み手に伝わりやすい英文を書くよう指導を重ねた。

以下に，実践事例を二つ紹介する。

まずは，３年生が取り組んだスピーチ原稿"The person I respect"である。これは，関係代名詞の定着を図る活動として行ったものである。

１．ｵｰﾄﾞﾘｰﾍｯﾌﾟﾊﾞｰﾝの生涯について reading を行い，人物についての紹介の文を読む。

２．1 minute talk で，ペアで実際に自分の尊敬する人物について簡単に相手に伝え合うことでアイディアを広げる。

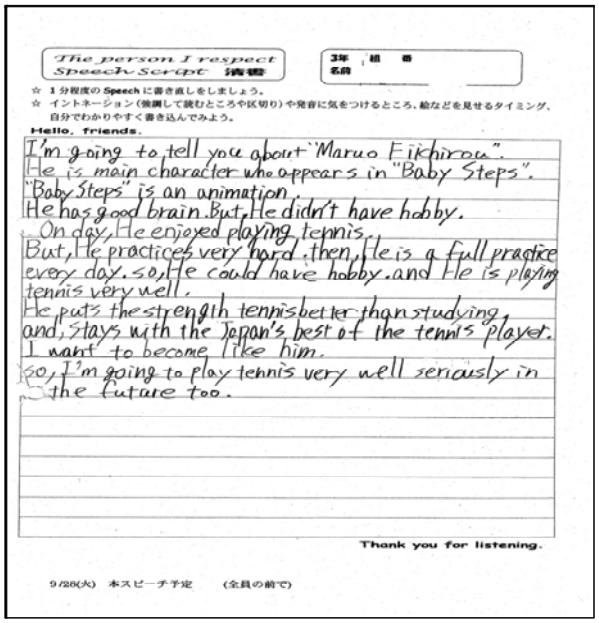
３．"The person I respect" についてのスピーチ原稿（図１）を書く。

・まずは文章構成を考え，一貫性のある文章かどうかを確認させる。

・スピーチの事前練習において生徒同士で相互評価させ，表現や語彙が適切であるかどうかを確認させる。

４．スピーチ発表をする。

図１ "The person I respect" 生徒作品


The person I respect
Speech Script 清書

☆ 1分程度の Speech に書き直しをしましょう。
☆ イントネーション（強調して読むところや区切り）や発音に気をつけるところ，絵などを見せるタイミング，自分でわかりやすく書き込んでみよう。

Hello, friends.
I'm going to tell you about "Maruo Eikhirou".
He is main character who appears in "Baby Steps".
"Baby Steps" is an animation.
He has good brain. But, He didn't have hobby.
On day, He enjoyed playing tennis.
But, He practices very hard. then, He is a full practice every day. so, He could have hobby. and He is playing tennis very well.
He puts the strength tennis better than studying, and, stays with the Japan's best of the tennis player.
I want to become like him.
so, I'm going to play tennis very well seriously in the future too.

Thank you for listening.

9/28(火) 本スピーチ予定 (全員の前で)

もう一つは，今年度１年生が取り組んだライティングで，パラグラフ・ライティングと呼べるものではないが，過去形のまとめとして行ったものである。

１．不規則動詞の過去形について学ぶ。

２．1 minute talk で昨日の出来事について話す。

３．1 minute talk で冬休みの出来事について話す。教科書本文の内容を理解する。

４．冬休みの出来事を書く。

５．教員自作の映像を見る。映像を前・後半に分けて，それぞれを生徒の半分ずつが見ることができる。ペアで，映像を見た生徒が見なかった生徒にその内容を伝える。

６．グループで，映像の内容を英文にまとめる。

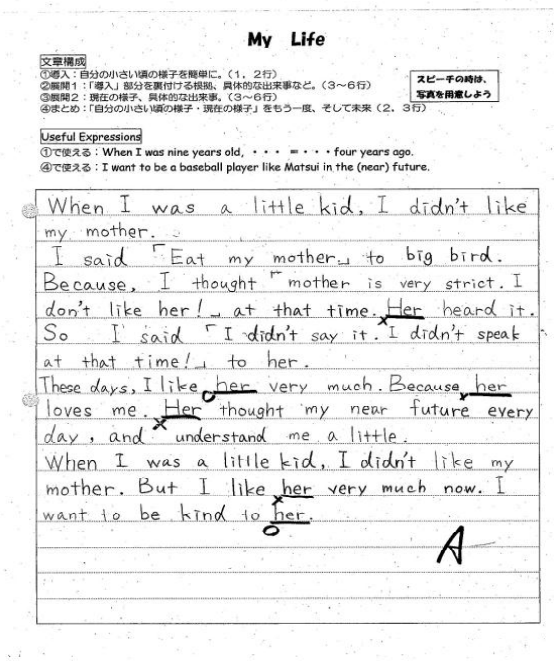
７．動詞の過去形テストを行う。

８．"My Life"をテーマにスピーチ原稿を書くテストを行う（図２)。次のような文章構成で書かせる。

導入：自分の小さい頃の様子を簡単に。【１，２行】
展開１：「導入」部分を裏付ける根拠，具体的な出来事など。【３～６行】
展開２：現在の様子，具体的な出来事。【３～６行】
まとめ：「自分の小さい頃の様子・現在の様子」をもう一度簡単に書き，今後の抱負で締めくくる。【２，３行】

これは，２年生より本格的にパラグラフ・ライティングに取り組むための練習として行ったものである。

図２　"MY Life"生徒作品


My Life

文章構成
①導入：自分の小さい頃の様子を簡単に。（1，2行）
②展開1：「導入」部分を裏付ける根拠，具体的な出来事など。（3～6行）
③展開2：現在の様子，具体的な出来事。（3～6行）
④まとめ：「自分の小さい頃の様子・現在の様子」をもう一度、そして未来（2，3行）

スピーチの時は、写真を用意しよう

Useful Expressions
①で使える：When I was nine years old, ・・・ ＝・・・four years ago.
④で使える：I want to be a baseball player like Matsui in the (near) future.

When I was a little kid, I didn't like my mother.
I said 「Eat my mother」 to big bird.
Because, I thought 「mother is very strict. I don't like her!」 at that time. Her heard it.
So I said 「I didn't say it. I didn't speak at that time!」 to her.
These days, I like her very much. Because her loves me. Her thought my near future every day, and understand me a little.
When I was a little kid, I didn't like my mother. But I like her very much now. I want to be kind to her.

A

③　単元を通した４技能の統合的な活用

１年生の現在進行形の導入から教科書を中心に扱いながら発表活動へつなげる。

１．【聞く→話す】

教科書本文にこれまで数回登場し，本単元で主役となる人物に関して，ティーチャートークを聞かせたりインタラクションを行ったりして，本単元への興味を持たせる。

教科書本文の CD を聞き，内容に関する質問とピクチャーカードを提示しながら次のような質問をする。そのピクチャーカードは，子どもたちがサッカーをしている様子が描かれ，“They're playing soccer in the street.” と言及されている場面である。

1-1 “Are they playing tennis?”
1-2 “What are they doing?”
2-1 “Are they playing soccer in the school ground?
2-2 “Where are they playing soccer?”

まず，明らかに “No.” と答えられる質問（1-1, 2-1）をする。次に具体的な内容を，現在進行形を使って答えさせる質問（1-2, 2-2）をする。生徒はここで初めて “be + ~ing” の形を使うので 1-2, 2-2 では are, doing, playing を強調してそ形と意味に気付かせる。

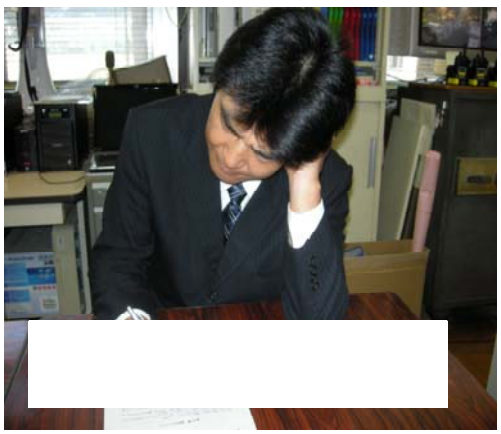
２．【話す→書く】

人や動物が何かをしている写真をスクリーンに映し出す。写真の人物や動物が何をしているのかを班で考えさせ，画用紙にその英文を書き制限時間後一斉に見せる。写真は一部分を隠したりして生徒の様々な発想を引き出す工夫をする（図３）。写真を映し出したとき，まず数名の生徒と次のような Q&A を行う。

T: What is this man doing?”
S1: He… sleeping.
T: Oh, he *is* sleeping. I see. How about you? What is he doing?”
S2: (I think) He is writing a letter.

ここでも “be + ~ing” の形に気付かせるよう教師（T）の最初の発問では is, doing を強調し，S の答を受け，間違いを訂正して復唱している。

図３　一部分を隠した写真



３．【読む→書く】

教科書本文を利用して語法定着・内容理解に取り組む。会話の途中の言葉を空欄にして推測することで思考力を鍛える。

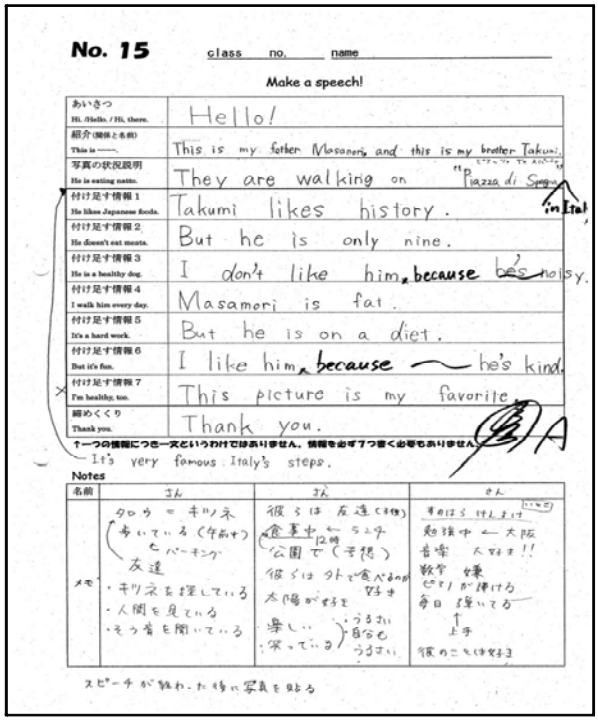
４．【書く→話す】

発表活動の Show&Tell を班内で行う（図４）。写真を見せながら，その人物や動物が何をしているかを最初に述べる。それから特徴などを述べる。聞き手が次のような質問をして，それに答える形式で話し手はスピーチを進める。

1 "Is he/she playing tennis?" "What is he/she doing?"
2 "Does he/she like ～?"
3 "How old is he/she?"

1 は最初に，2 以降はスピーチ中か後にする。

図４　Show&Tellの生徒作品



(3) 考察及び成果と課題

1 minite talk は，「話す」だけでなくその他の領域にも有機的に関連させることができ，４技能を統合的に取り入れた活動として有効となった。ただし，トピックの選択が重要で，前時の復習となるような言語材料や題材を取り上げることで，その言語材料を活用して定着を図ったり，その題材について意見を述べるようなものにしたりして，「考える力」を育成することも兼ねた活動にもつながった。

パラグラフ・ライティングの手法は，writing 活動を含むプロジェクトを２年次は全６回，３年次にはこれまでに３回と，繰り返し行ってきた中で少しずつ定着してきた。主なねらいとしては，相手に伝わりやすい文章構成を考えて書く力を身に付けさせて，「思考力・判断力・表現力等」を育成することにある。２年次の後半から「文法・構成・内容」の３点について評価をし（表１），データを収集してきたが，その時に扱う新出言語材料や題材によって評価の結果は不安定であった。しかしながら，書く量が増したことが writing において伸びた力としてはっきりと見てとれた。また，「最近意識していること，できるようになったこと」に関する生徒の意識調査（表２）では，パラグラフ・ライティングの効果を実感している生徒が少なくなかった。

表１　ライティングの評価規準

	文法	構成	内容
5	既習の文法事項や表現を使って表現できている。間違いがほとんどない。語彙の使い方も的確である。	つなぎ言葉や、順序立てを工夫し、よく構成されている。	
4	小さな間違いはあるが、既習の文法事項や表現を使って表現できている。語彙の使い方もほぼ的確である。	ほどよく構成されている。つなぎ言葉などに注意をすれば、よりよくなる。	
3	いくつか小さな間違いはあるが、既習の文法事項や表現を使って表現できている。語彙もほぼ適当である。	ゆるく構成される。	様々な視点から、topic sentences を考えようとしている。
2	数カ所に既習の文法事項や表現の使い方の間違いがある。語彙の選択に間違いが多い。	構成に乏しい。（topic, supporting, concluding sentences がはっきりしない。）	Topic sentencesについて自分なりの考えが書いてある。
1	既習の文法事項や表現の使い方に間違いが多く、内容を読み取るのが困難である。語彙の選択に間違いが多い。	構成されていない。	Topic sentencesについての考えが少ない、あるいは外れている。

また，１年生のライティングに関して，「現在進行形」で書いた英文（図４）と「過去形」で書いたもの（図２）とを比較することで，書く力がいかに伸びているかがよく分かった。図４は１０月に，図２は２月に，共に同じ生徒が書いた作品である。図４は家庭学習において辞書等を使いながら時間をかけて進めたのに対し，図２は授業内の３０分で、その場でテーマを与え、辞書を使わ

ずに書いたものであることからも，その伸び幅の大きさが分かる。

単元を通した４技能の総合的な活用については，インプットの充実を意識して教員が多くの英語を使い，全体にも個々にも話しかけるように努めた。それによって，生徒が英語を使う機会も増え，Show&Tell　も意欲的に行うことができた。

表２　生徒の意識調査抜粋（３年生2010年11月）

「話すこと」についての自由記述

（1 minite talk を通して）

・書いてあるのを見なくてもスラスラ話せるようになった。
・「話せなくても話そうとする」ことが大切だと思った。
・自分がその場で思ったことを自分の知っている単語でしっかり話すということが少しできるようになった。
・とつぜんの質問にも，自分なりの考えを，すぐ思いついて英語にするようになりました。
・特にいろいろと準備するわけではないので，その場で日本語を自分の言える英語に直す能力がついたと思う。
・たとえ少しぐらい文法なんかが違っても，それっぽい言葉をつなげて伝えようとするようになった。
・最近ではアドリブでも問題を言えるようになった。

「書くこと」についての自由記述

・最初はただ辞書を使って書いているだけだったが，（中略）構成を意識しながら自分なりに書けるようになった。
・（前略）また辞書にたよらず既習の表現で書けるようになった。
・文章構成を１回日本語でもいいから必ず考えるようにした。
・書く順番に気をつけるようにした。内容の中でも，時間や大事な順番などで分けれるようになった。
・接続詞をうまく活用し結局何が言いたいのかを明確にする。
・感想と事実の区別をする。自分の意見だけを人に押しつけても意味がないから。
・主語・述語をはっきりさせること。また topic supporting と conclusion がしっかりなるように心がけている。
・1 ミニッツで学んだ表現も使ったので表現が豊かになった。

３　研究の成果と課題

それぞれの取組は，４技能を統合的に活用する言語活動であり，「思考力･判断力・表現力等」を育成することができていることを少なからず感じている。特に，パラグラフ・ライティングにおいては，自分の意見を述べるための根拠が必要であり，そのためには十分なインプットが必要であることが分かった。例えば，２(2)②のパラグラフ・ライティングの実践例の手順にあるように，まずは「読む」活動をしっかりと行ったからこそ，「話す・書く」活動が充実したものになった。

したがって，４技能の統合的な活用と思考力･判断力・表現力等の育成は表裏一体の関係にあることが分かった。

【4技能の統合的な活用】

「受信（聞く，読む）」→「思考」→「発信（話す，書く）」

【思考力･判断力･表現力等の育成】

しかしながら，ライティング活動ではデータ分析を有効に生かすことができなかった。「思考力･判断力・表現力等」の経年変化を見取るデータ収集の方法を考えていきたい。また，最終ゴールとなるトピックを設定し，３年間を通して系統性のあるものとして取り組んでいきたい。